

RPJ News

2021年 9月号

特定非営利活動法人(NPO法人)

精神保健福祉交流促進協会 Refresh Project

〒130-0001 東京都墨田区吾妻橋2-17-7-801

毎月1回発行 E-mail ref-pj@mx5.ttcn.ne.jp

発行責任者：志井田美幸/ 長野敏宏/ 仁木守

連絡先 070-8438-0688

ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

内 容

- * 2019年イタリア地域精神保健研修報告 第12回
 - 3 フリウリ=ヴェネツィア・ジュリア州トリエステの研修
 - 3-4 統合と社会振興のためのスポーツ活動での研修

- * 2019年イタリア地域精神保健研修報告 第12回

3 フリウリ=ヴェネツィア・ジュリア州トリエステの研修

3-4 統合と社会振興のためのスポーツ活動での研修

この組織の責任者であるブルーノ・オパッティさんにお話を伺います。また当事者さん2名が同席してくださいました。



2011年頃に10名位で集まって活動を始めました。「サマルカンダ」という名前の組織で「コリーナ」というコーペラティーバに所属しています。

何故活動を始めたかというのは、狭い意味での精神障がい者活動から抜けだして、広い社会の中に自分たちを置きたいという願いが高まってきたからです。勿論その前に様々なサービスの中で色々な経験を積んできている当事者や、私のように子供が当事者の人たちによって構成されています。勿論非営利団体です。我々は精神科医やエデュカトーレの様な肩書を持っていない者同士の集まりです。ですから手にしている手段をどの様に利用するかという事で活動してきました。

そこで我々は皆さんが興味を持っているサッカーを活用して何かをしてみたいと考えたのです。イタリアは小さい子供の頃からサッカーで遊んでいるというお国柄なのです。現在会員は80名位います。そして健常者と障がいの割合は、ほぼ半々です。活動の一環として山登りなどもします。誰にでも精神的・身体的に効果のある、スポーツや山登りを取り入れています。健常者にも効果がありますが、精神障がい者にとっては更に良い効果があることがわかっています。障がいを持っていない人にとっては単なるスポーツであっても、障がいを持っている人にとっては非常に意味のある活動なのです。そして健常者と障がい者が一緒になって試合に勝つという事はとても良い経験になります。スポーツの中で体を動かすということは、身体的にも精神的にも非常の良い効果が出ます。今頃になってですが、この効果を示す科学的論文が発表されました。私は何年も前から実際に感じていましたが、やっと出てきたかという感じです。

体を動かさないと健常者であっても体の不調を訴えるのに、障がいを持っている者には2重に体に不調が表れるのです。つまりそれは障がい者は病気のため薬を飲んでいるからなのです。バザーリアは監獄のような精神病院から多くの精神障がい者を解放してくれたのですが、我々は精神障がい者を薬から解放したい、「薬からの脱却」それが我々の目標で次の段階に進めたいのです。センターでは若い人たちが薬に依存してしまいます。病気を治すためと言いながら、生活をするため薬に依存しなくてはいけなくなっているのです。ただ気持ちを発散させるというだけで体を動かすのではなく、スポーツをするという事が大事なのです。健康を維持するために運動をしなくてはいけないという事は誰でも解っています。身体的な障

害を無くすため、予防するためにもスポーツは大変重要です。センターの方、特に在宅ケアのグループから「一緒に来てほしい」と連絡があって、患者のところに出向き会って話をします。「君はスポーツをしたことが有りますか？特にサッカーをしたことが有りますか？」と聞くと、大概「小さいころからサッカーをしている」との答えが返ってきます。そしてここから活動が始まります。センターの中に留まっているような患者を外に出して、山に連れていったりサッカーをしたりします。このように情報を聞き出し活動に参加させる役割を我々は担っています。センターではケアされているけれども、その中でしか生活できない人たちを我々は外に連れ出して活動をしているのです。センターに依存していた人たちが、1年2年スポーツをしていると今度はスポーツ依存症になったのかと思うようになります。その位までスポーツに打ち込んでいるように見えます。もしセンターのサービスがうまくいっていないような場合、例えば保健医療が殆ど財政困難な状況に追い込まれていますので、我々の会としては何をすべきかと考えた時、サッカーの試合を何度も行ったり高い山に登ったりと、活動を頻繁に行うなど、我々は週3回運動する機会を作っています。

向精神薬を服用している人は、服用していない人と比べると寿命が5年以上短いという事が知られています。サッカーでは週1回の練習と試合を1回、この試合は市内の一般市民チームが相手で障がい者を含んだチームではありません。試合の結果などはサマルカンダのホームページで公表しています。我々は精神科医や看護師、もちろん家族とも協力し対応しながら活動しています。医者の前に行って「あなたが薬をくれていた頃より、今はこんなに元気になったよ」「薬を減らした方が良いのではない」という様な、医者がびっくりするような状況が生まれています。薬というのは製薬会社との利害関係が深く関与しているのではないかと、僕は疑っています。自分が本当に生活を享受するうえで、まずはスポーツをやる事で全ての向精神薬はいりません。コレステロールの薬も糖尿病の薬もいらなくなるでしょう。そして何でも食べられるようになるでしょう。この様な事を医者にも言うのですが、医者「あなたが患者にその様な事を言えば良いのではないですか？」、私はあなたに言いたいのです。という感じで理解してもらえません。

・・・参加者の声「医者は頑固だから、自分の意見はなかなか変えないよね」

私は確信をもってこのような事を話しています。皆さん方も日々確信を持って活動していると思うので、私の話を理解していただけたらと思います。まともに対応してくれない、理解してくれない医療関係者しかいない場合、家族は大変な思いをします。トリエステは良い町です、そしてトリエステの人たちは自分の町を愛しています。多分日本に行って仕事をしようとする人はいないと思いますよ。フランスとベルギーにもサマルカンダと関係している組織があり、それぞれ違うシステムの下ですが活動しています。フランスは小さな精神病院があちこちにあり、重症者は閉じ込められています。トリエステの考え方で行けば、これはまずいことだと思います。しかしフランスの在宅ケアは非常に進んでいて、かなり充実した在宅ケアが行われています。ベルギーの場合は精神病院が多く存在します。サッカーの試合で行ったのですが、昔のような考えで精神病をとらえています。スポーツも行っているのですが、患者同士で患者内部だけで実施されています。トリエステは患者たちだけではなく一般市民との間でスポーツを楽しんでいます。相手チームは我々が障がい者チームだという事は知らないで試合をしています。選手が何かおかしい状況にあるときはベンチに呼んで休ませることはありますが、普段でも足の調子が悪いかで交代することもあるので、相手は障害が理由で交代したという事は解っていません。サマルカンダのチームは健常者と障がい者の割合は半々くらいです。

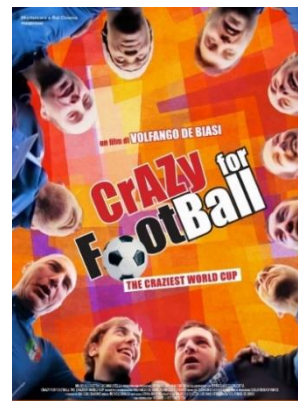
練習や試合のための会場を借りることや移動する交通費が必要になりますが、費用は親組織であるコーペラティーバ「コリーナ」からとイタリアの医療保健事業体からです。我々はプロジェクト活動の資金としてそれぞれに請求しています。年間2万ユーロ位のお金が動いていて半々くらいです。但し事業体から資金をもらうためにはプロジェクトが承認されている必要がありますが、我々は実績を上げているので毎年受給できています。イタリアでどの位予算が削られているかということ、以前は我々のような組織がトリエステに50位ありましたが現在は3つしかありません。予算が少なくなっているため成果が出ているところに絞っているためです。国の補助金は障がい者に出るのでサマルカンダは半数が健常者のため障がい者分しか出ません。しかしイタリアでは所得税申告するとき、所得の0.5%は福祉や社会事業に充てることができる制

度があり、所得申告書上にこの金額を何処で活用するかを記載することができます。そして我々は、このお金をもらうことによって何とか賄うことができます。トリエステの精神医療の中では、スポーツが治療・回復のために如何に役立つかという事が認知されています。古い考え方の医療従事者は、スポーツは無駄な時間を穴埋めするようなものだとしか考えていなく、セラピーの一環だととらえることができていません。この様な古い考え方をする医者や医療従事者も未だいるのです。

Q) プロのサッカーチームとは何か関係がありますか？

A) トリエステにはプロサッカーチームがありませんが、サマルカダのチームはセリエ C 位でセミプロのレベルですよ。私は局長に、「お金さえくれればセリエ A のチームになれるよ」「お金は無駄にならないよ、治療のために使うのだから」とよく言っています。(笑)

大阪で行われた世界サッカーの大会にサマルカダの選手が 2 名選抜されて入っていました。「クレイジーフットボール」というドキュメンタリー映画が出来ていますが、日本では観ていませんか？イタリアの大手映画会社が開与して制作されました。また記録本としても出版されています。聞くところによるとローマから行った撮影スタッフが、大阪で相手の承認を得ずにいたるところで撮影したという事で、大阪で大変問題になったという事です。また日本人から歓迎夕食会に誘われていた選手が、当日撮影スタッフに誘われて一緒に夕食に出かけてしまい歓迎夕食会に出なかったということや、ローマから来たスタッフが飲みすぎて寝坊し帰国便に乗り遅れイタリア大使館に行かなければいけなかったことなどのエピソードも本には書かれています。トリエステの人間だけならこの様な事は無かったと思うのですが、イタリア気質のローマの人間がいたための出来事です。トリエステはオーストリア帝国の支配下にあつたため規則正しい生活をする習慣が身につけているのです。是非本も見てください。



※日本では「ヨコハマ・フットボール映画祭 2020」で 2016 年に大阪で開催された世界大会に参加したイタリア代表チームのドキュメンタリー映画「ソーシャルフットボール イタリアからの挑戦」という名前で紹介されている。

Q) 精神病院を閉鎖するという法律が出来た時に、精神障がい者を持つご

家族はどの様に受け止めていたのでしょうか？不安に思われる方のいたのではないかと思います。そしてそれがどのように変化してきたのか、どの様な事で家族が安心感を得ていったのか、などお聞きしたいです。

A) 40 年前に私はここにいなかったので解りませんが、デラックワ元局長は精神病院を閉めたあと町に出てくる元患者たちを、精神的・心理的に受け入れられるように全政党を上げて市民たちとの話し合い、講演会など多くの催しを実施しました。トリエステは港町であり、国境が近いことなど多くの人たちと交わる機会が多くありました。様々な人種がトリエステを訪れ交流する場所でしたので、精神病患者が町に出るということに対して理解がありました。街中で調子の悪そうな人を見かけることはよくあります。しかしそれを見た市民が警察や救急車を呼ぶことはありません。普通に対応しています。市民はその様な状況をノーマルな市民生活として受け入れています。患者を社会復帰させるこの様な方法が後戻りしないことを願っています。

色々な事件があり報道されたりしますが、お金が無いためにサービスが行き届いていないような場所で事件が起きたりしています。普通の生活に戻るために国は大きなお金を投資する必要があります。その様にすれば必ず普通の生活に戻れます。私のトリエステの経験から間違いなく言えます。

イタリアでは医療に使われる予算の 3.4%位が精神医療に使われています。スペインは 7%ですのでイタリアは大変少ないのです。これはイタリアの精神医療が巧く回って節約できていたので、結果的に少なくされてしまったのです。先ず第一にサマルカダの活動にもっとお金が欲しい。多くの患者さんがスポーツなどができるような環境作りにお金を使うことが健康維持に繋がり、住居のためにお金を使うことが家族との

生活を支え、仕事をするためにお金を使うことができるなどお金を使うことで出来ることが沢山あります。あなた方は働いていますよね、仕事を辞めて次の仕事が見つからなかったらどうなりますか？病気になってしまふ可能性もありますよね。仕事が無かったら道路清掃の仕事でもしなくては行けないが、それはしたく無い。私のする仕事では無い。お金が回ってこないということが如何に苦しい事かが判ります。それを解決するためには国が企業にお金を回さなくては行けません。精神障がい者を雇ってくれるような企業にお金を回さなくては行けません。仕事を失ったら家から出たくなくなったりします。そして職を失った彼らを国は養っていかなくては行けないのです。その時企業は何もしません。その様な悪循環になります。逆に企業にお金が回れば彼らを雇ってくれて好循環が生まれてきます。企業をしっかりと支援しない近視眼的な政策が結果悪循環を生んでいます。この様に企業支援が好循環を生む唯一の方法なのですが、このような政策をとる国は一つもありません。この背景にいるのは製薬会社です。全ての悪の根源は製薬会社です。(笑)

私は兄を亡くしたけど愛犬はいます。病気を患いましたが、その時はセンターが助けてくれました。アシストしてくれて歩けるようになりました。今はセンターを利用しなくても一人で生活していけます。体調を崩して仕事を失ってしまい、それが精神疾患だということ次の仕事を見つけることが大変難しい。1年2年とそれが続くと残りの人生はガタガタになってしまいます。仕事が無くなるということは本当に大変な事なのです。やらなくては行けないことはよく解っているのですが、それをやるかやらないかということで人生は大きく変わってしまいます。

精神科医のところ若い患者が来てサッカーが好きだと言っている、という電話がサマルカンドに有ったので、私はすぐ行くと伝えました。それは精神科医が薬を処方する前にサッカーに誘いたかったからなのです。(笑)私は若い人の気持ちを良く知っているつもりなので、その様な事をします。私の息子が亡くなった状況は、5年前にクライシスがありそれが繰り返され数日危機的な状況にあって、住んでいた家の屋根に登ってしまった。その時彼の状況をよく理解している人が来てくれると良かったのだが、警察を呼んでしまったのです。統合失調症を患っている人にとって最も敵対する人は制服を着ている人なのです。白衣を着ている精神科医にも敵対心をむき出しにします。理由は彼らを拘束する人と感じているからなのです。精神疾患を患っている人は嫌だと思ふ人が誰でもいます。そして制服を着ていると2重に嫌だと感じてしまいます。警官は息子に降りて来いと叫びました。そして息子は屋根から飛び降りてしまいました。息子と似たようなケースが今でもあり、やはり警察を呼んでしまう市民は未だま多いです。市民の理解は未だ得られていない、という部分は沢山あります。

トリエステは非常に精神疾患に理解を示している町で、在宅ケアも非常に進んでいますが、色々発生するケースに介入できるか否か、夜8時を過ぎると対応組織が変わってしまう。通常の病気の場合は夜が明けのを待つことができますが、精神の場合は待ってられないのです。

Q) 家族は大切な存在ですか？

A) 難しい問題です。特に母親は精神疾患の原因になっている場合は多くあります。母親は「過保護」か「育児放棄」の何れかになる場合が多くあります。その様なお母さんたちは息子にサマルカンドに行くな、と言っているようです。(笑)その様なお母さんがたまにサッカーの試合に来ていますが「来ないで」といつも思っています。有り難うございました。

—編集後記— オリパラが終わり、すっかり秋になりました。新型コロナウイルス感染症は収束したわけではありませんが、毎夕に発表される各地域の新規感染者数はこの夏の数値と比較すると劇的に減少した状態にあります。恐らく、年末に向け再び感染者の数値が上昇しはじめるまでのわずかなこの期間に、コロナのことばかりではなく、他のことにも気持ちを馳せたい思いでいます。昨日、サビ児管の更新研修を受講しました。他事業所のスタッフの方と情報交換の場となり、気持ちのギアがチェンジする音がしたような一日でした。本協会でも Zoom での情報共有の場の開催などの計画を・・・と思っております。(shiida.m.)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL070-8438-0688